



Title	第二部 部局史. 遺伝子実験施設
Citation	北大百二十五年史, 通説編, 1155-1156
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/28200">https://hdl.handle.net/2115/28200</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	hokudai125yr_tsusetsu_1155.pdf



遺  
伝  
子  
実  
験  
施  
設

遺伝子実験施設は、当時急速に発展し始めた遺伝子研究を推進・支援するために、一九八五（昭和六〇）年四月、東京大学、筑波大学に次いで国内三番目に学内共同教育研究施設として設置された。施設はP3実験室を備えているため、軍事研究に利用されることを危惧する人々の設置反対運動もあつた。建物の壁は、組み換え体が環境中に出ることを防ぐために、亀裂防止に格段の注意が払われた。一五〇〇平方メートルで一部三階建ての建物は、翌年四月に理学部の西側、農学部の実験圃場を一部浸食する形で完成し、谷藤茂行施設長の努力により、直ちに供用が開始された。専任職員は助教、助手、教務職員各一名で、独自の研究を推進すると共に、教育訓練を通し学内外への組み換えDNA実験技術の普及と安全管理の確立に貢献した。一九九三（平成五）年には、大学院地球環境科学研究所の新設に伴い、理学部附属動物染色体研究施設と共に、生態環境科学専攻染色体細胞学講座を担当することとなった。一九九五（平成七）年より、規模を拡大して運営の効率を上げるため、実験生物センター、理学部附属動物染色体研究施設との合併が模索されたが実を結ばなかつた。二〇〇一（平成一三）年四月、基礎研究の充実を目指す、先端科学技術共同研究センターの要望に添う形で上記二施設と共に合併し、独立施設としての一六年にわたる歴史を閉じることになる。

当施設はP3実験室（1）とP2実験室（5）を備えているが、最大の特色はトランスジェニック植物個体を栽培し、開花結実させて種子を集める実験も可能な隔離温室を備えていることである。植物の細胞・組織培養施設も整い、植物に関しては一連の組み換えDNA実験が施設内で完結できるようになっている。また、RI実験室はキャンパスの南側では最も設備が整つたものとして多くの利用者に親しまれた。遺伝子実験施設ではこれらを利用した教育訓練の実施だけでなく、学内利用者に実験場所と機器を提供し、研究・教育活動の支援を行つてきた。先端科学技術共同研究センターとの合併後、遺伝子実験施設の機能はニーズ育成領域の生体情報系研究分野と研究支援室に受け継がれる予定である。

（執筆 高木信夫）